

キャリア相談では、「自分の仕事の相談の中にも、複雑に絡み合った思いや人間関係が時折顔をのぞかせる。毎度のことながら相談時間の一時間が終わると、「これで良かったか、こう言った方が良かったのではないか、そもそも訴えたいことは他にあったのでは……」と一人反省してしまう。この日もそんな気持ちになった一日だった。

ある金曜日の夜。顔色もさえず、暗い表情で訪れたFさんは、昨年の四月からお客さんと接する部署に異動になった。それまでの十七年間は人事部や経営課などといった、社内ではいわゆる出世街道をまっしぐらに進んでいた。頑張り屋でまじめ、同僚からも一目置かれる存在だった。そんなFさんなので、異動前からやる気に満ちあふれていた。ところが、お客さんとのやりとりががみ合わず、怒らせたり、迷惑をかけた。時には同僚の仕事を増やしてしまおうFさん。気持ちばかりが空回りをする。「まだ慣れないから、気にすることないよ」と、同僚

異動先で空回り

は声をかけてくれるが、「完ぺきにできない自分と、そう励まされてしまう自分が情けない」と、落ち込んだ様子で話す。

悪いことに、部署内には社内でも厳しいと評判の先輩がいて、仕事上助けてほしくても助けてもらえない。体調が悪いと訴えても「そんなの、みんな一緒。甘えたらあかんよ」と一蹴されてしまう。実際のところは体調が悪くても休めないという。お客さんや同僚に迷惑がかかると思うと安静にはしてられないのだそう。無理がたたって、今は体調がすこぶる悪いらしい。Fさんの話からは、「自分が必要とされていないんじゃないか」「役に立たない人間だとレッテルを貼られているのではないか」とい

できない自分 情けない

う不安をぬぐい去るように、がむしゃらに仕事にかじりついているようにとれた。話すうち、Fさんの目にはついに涙が。でも、こらえようと必死になっている。私は、思わず「Fさんは、じゅうぶん頑張っていますよ。お客さんにも同僚にもFさんの一生懸命な気持ち、ちゃんと届いていると思う」と、「先輩も、あなたの存在が一番大事だから厳しくするんじゃないかな」といった言葉を掛けた。

「本当にそうでしょうか……？」と、か細い声で自信なさげに話すFさんに、「大丈夫ですよ。みんな分かってくれていますよ」

しばし沈黙……。「今日は誰にも言えないことを言えて、ちよっとスッキリしました。仕事のことはかり考えても駄目なので、休みの日くらいは気分転換しないといけないですよ。ね……。また来てもいいですか？」と、努めて明るく言うFさんに「もちろんです。ぜひいらしてください。

いつでも待つてますよ」。そう言うと、Fさんはほえんだが、瞳の奥にある暗い暗い影が少し気になった。八時の時報とともに、ひとまず相談を終了。

相談に来られた方が、私を信頼し話をしてくださっている以上、いいかげんな気持ちで接したことはない。このことは自信を持って言える。でも、相談者は楽になっただろうか。今回に関しては、そんな思いが帰宅道中グルグルと頭の中を巡っていた。

仕事って、目の前の箱を一つずつ片付ける作業に似ている感じがする。ひょいっ」と片手で持てるものもあれば、重くてずるずる押して運ばねばならないものもある。山積みの箱を見て嫌になったり、前に進んでいないようで悲しくなる時もある。でも、その手を止めなければ、いつか必ず目の前は開けてくると思っている。Fさんもきっと同じように乗り越えていってくれるだろう、そう前向きに信じたい。



イラスト・多田くにお

(福井新聞社提供)